源氏物語屏風（げんじものがたりびょうぶ）

六曲一隻　紙本著色　押絵貼　松井文庫所蔵

総高 155.0 ㎝　総幅 364.0 ㎝　本紙縦 138.1 ㎝　横 56.2～9 ㎝　江戸時代前期（17 世紀）

この屏風は、『源氏物語』54 巻のうち、12 の場面を描いています。源氏絵といえば、室町時代の土佐派という宮廷絵師たちが完成させた細密な描写、濃密な色彩、緊密な画面構成を特徴とする作品が主流ですが、本作品は一扇に 2 場面ずつ、空間をたっぷりとって描き、色彩も比較的あっさりしています。

これは、江戸時代、幕府の御用絵師として絵画界のリーダーとなった狩野派（墨線を得意とする）が生み出した新しい傾向（＝墨線を活かして空間を取る画面構成）の流れを汲むと思われます。

江戸時代を通じて、源氏絵はたくさん描かれ、本屏風も量産品のひとつと見なければなりませんが、人物の描写に比べ、画中の襖などに描かれた水墨画が、なかなかうまいところに意外な見どころがあります。

源氏物語屏風場面一覧表

源氏物語のうち、屏風絵としてよく絵画化される場面は、ほぼ決まっており、描かれる内容も定型化しています。よく選ばれる（好まれる）のは、四季の風物が印象的な場面、儀式宴遊など華やかな場面、そして、源氏が女性の様子を垣間見る場面です。

表中の●印は、この展示室で紹介した源氏物語小屏風（六曲一双・A）、源氏物語屏風（六曲一隻・B・いずれも松井文庫所蔵）に描かれている場面です。（※印は完全に確定できないもの。◎印は選ばれるのが比較的珍しい場面。）

	巻名	場面概略	A	B
1	桐壺	桐壺の更衣、光源氏を抱いて帝の前に進む。		
		高麗人、源氏の相を見る。	●	
		源氏元服の儀式。		●
2	帚木	雨夜の品定め。		
		左馬頭の話。女の琴に笛を合わせる男。		●
		空蝉の部屋をうかがう源氏。		
3	空蝉	空蝉と軒端荻が碁を打つのを見る源氏。		●
4	夕顔	夕顔の花を扇にのせて差し出す童女。	●	
		六条御息所の侍女と歌を交わす。		
		夕顔と過ごす源氏。市井の音が聞こえる。		
		夕顔との一夜。車の柄を高欄に引掛けて朝を待つ。		
5	若紫	逃げた雀を追って出た若紫を垣間見る。	●	●
		源氏、滝の音を聞きながら物思いにふける。		
		病も癒え、僧都らと桜散る山中で酒宴。		
6	末摘花	常陸宮邸で、頭中将に見つかる。		●
		雪の朝、常陸宮の姫をはじめて見て、驚く。		
		常陸宮邸の雪を随身に払わせる。		
		源氏、紫の上と鼻に紅を塗って遊ぶ。		
7	紅葉賀	源氏と頭中将、青海波を舞う。	●	●
8	花宴	桜花の宴の夜、扇をかざして歩く朧月夜と会う。		●
9	葵	六条御息所の車、押しのけられる（車争い）。	●	
		紫の上の髪そぎ。		
10	賢木	野宮に六条御息所を訪ねる。		
11	花散里	源氏、中川辺を通り、昔の恋人を訪ねる。		
		麗景殿女御と昔話をしているとホトトギスが鳴く。	※	
12	須磨	海の見える廊で、沖の舟や雁を眺める源氏。	●	●
		中秋の十五夜、源氏主従恩賜の御衣に涙する。		
		源氏、頭中将と馬が稲を食うのを珍しげに見る。		
		源氏、海辺で禊中、にわかに雷雨に襲われる。		
13	明石	明石入道邸で、源氏琴を弾く。入道は琵琶を奏す。		
		八月十三夜、明石邸へ向かう源氏。	●	
14	澪標	源氏、住吉詣をする。海上には明石上の船が来る。	●	
		惟光、源氏に硯箱を差し出す。		
15	蓬生	源氏、末摘花邸を訪れ、惟光に蓬の露を払わせる。		
16	関屋	源氏、石山詣の途中、逢坂関で空蝉一行と出会う。		
		小君に伝言する源氏。		
17	絵合	源氏、帝に奉る絵を紫上と選ぶ。		
		斎宮方、弘徽殿方に分かれ清涼殿で絵合。	●	
18	松風	明石上、源氏の形見の琴を弾くと松風が鳴る。		
		桂の院へ寄った源氏に、人々萩の枝などを奉る。		
19	薄雲	明石上、二条院に引き取られる姫君と別れを惜しむ。		
		紫上のところに寄った源氏に、姫君がまといつく。		
		源氏、藤壺女院の死を悲しみ、念誦堂にこもる。		
20	朝顔	源氏、朝顔斎院に朝顔の花を贈る。		
		雪の夜、源氏、紫上と童女たちの雪転ばせを見る。	●	
21	少女	五節の舞姫に選ばれた惟光の娘を、夕霧垣間見る。	●	
		秋好中宮、秋の花紅葉を箱に入れて紫上に贈る。		●
22	玉鬘	玉鬘、求婚者から逃れ早船に乗り、上洛。	●	
		源氏、几帳を押しやって、はじめて玉鬘を見る。		
		暮に源氏、女たちへ配る新年の晴着を紫上と選ぶ。		●
23	初音	六条院の正月、源氏、紫上と鏡餅の祝いをする。		
		子の日、明石上、姫君へ鶯をつけた松などを贈る。	●	
24	胡蝶	春の六条院で、龍頭鷁首の船を浮べ船楽を奏させる。		
		紫上、着飾った童女を使として秋好中宮へ桜と山吹を贈る。		●
25	蛍	源氏、兵部卿宮に見せようと玉鬘の側に蛍を放つ。		
		玉鬘のもとに、兵部卿宮から菖蒲に付いた手紙が届く。		
26	常夏	釣殿で川魚を味わいながら、源氏、夕霧・柏木らと歓談。	●	
		源氏玉鬘を訪ねる。若者たち撫子の庭にたたずむ。		
		近江君が五節の君と碁を打つのを、大臣垣間見る。		

	巻名	場面概略	A	B
27	篝火	源氏、琴を枕に玉鬘と添い寝。池端で篝火を焚く。	●	
		夕霧、柏木らが呼ばれて合奏。源氏琴を弾く。		
28	野分	御簾の間から、夕霧、はじめて紫上を垣間見る。		
		秋好中宮の庭で、童女たちが虫籠に露を入れる。	●	
		源氏が玉鬘を引き寄せるのを見て、夕霧怪しむ。		
29	御幸	十二月、大原野に鷹狩の行幸。	●	
		行幸に不参の源氏に、雉子が贈られる。		
30	藤袴	夕霧、藤袴の花で玉鬘に言い寄る。		●
31	真木柱	玉鬘のもとへ通う鬚黒大将に、夫人火取りを投げる。		
		鬚黒の娘、柱の割れ目に歌を書いた紙を入れる。		
32	梅枝	源氏、前斎院より梅の枝とともに薫香を贈られる。	●	
		明石姫君の裳着の前夜、源氏と兵部卿宮と薫物を合わせる。		
33	藤裏葉	内大臣邸の藤花の宴。柏木、夕霧の盃に藤花を添える。		
		紅葉の盛りに、冷泉亭六条院へ行幸。鵜飼をして歓迎。	◎	
34	若菜上	玉鬘、子の日に二人の男の子を連れて源氏を訪ねる。	◎	
		蹴鞠の最中、御簾の間から女三宮の姿を柏木見る。	●	
35	若菜下	源氏、紫上を住吉社に参詣。		
		正月、六条院の女たち、琵琶・琴・箏などで合奏。		
36	柏木	小侍従、女三宮に柏木からの手紙を渡す。		
		病床の柏木、女三宮の返事を読む。		
37	横笛	院から筍など贈られる。幼い薫、筍を口にする。		
		夕霧、落葉の宮を訪ね、柏木遺愛の笛を吹く。		
38	鈴虫	女三宮を訪ねた源氏、蓮の歌を扇に書く。		
		八月十五日の宵、源氏琴を弾く。		
39	夕霧	夕霧、紅葉の小野山荘を訪れる。		
		雲居雁が隠した落葉宮からの手紙を、夕霧探す。		
		秋の小野山荘で、夕霧、夕日に扇をかざす		
40	御法	三月、紫上法華経供養の法会を催す。陵王舞う。		
		秋の夕暮れ、重病の紫上源氏らと歌を交わす。		
41	幻	源氏、紫上形見の紅梅に鶯が来て鳴くのをながめる。		
		源氏、紫上の手紙を読んで泣く。		
		源氏、紫上の手紙に歌を書いて皆焼かせる。		
		源氏、御仏名の導師の僧に酒をねぎらう。梅の花に雪。		
42	匂宮	御所での正月の賭弓。		
		賭弓の後、公達たち六条院へ向かう。		
43	紅梅	大納言、紅梅の枝に文をつけ、匂宮に届ける。		
44	竹河	玉鬘の姫君たちが碁を打つのを、蔵人少将覗く。		
		薫、大君のいる冷泉院で、藤侍従と藤をながめる。		
45	橋姫	秋の末、馬で宇治の八宮邸を訪ねる薫の一行。		
		中君が琵琶、大君が琴を弾いているのを、薫垣間見る。		
46	椎本	薫・匂宮・夕霧ら、舟で川を渡り、八宮邸を訪ねる。		
		年末、八宮へ山の阿闍梨から炭などが贈られる。		
47	総角	薫、屏風を押しのけて大君にせまるが、拒まれる。		
		薫、匂宮を誘い、宇治川に船を浮かべて紅葉狩り。		
48	早蕨	ひとり残された中君のもとへ阿闍梨から蕨や土筆が贈られてきた。		
49	宿木	帝、薫と碁を打ち、庭の菊を折らせて女二宮降嫁をほのめかす。	●	
50	東屋	中君が絵など出して慰めると、浮舟、熱心に見入る。		
51	浮舟	匂宮、再び宇治に行き、浮舟をはじめて垣間見る。		
		匂宮、宇治川の舟中で、浮舟に変らぬ愛を誓う。		
		宇治邸に来た匂宮、侍従に浮舟への取次ぎを頼む。		
52	蜻蛉	薫、橘の香にホトトギスが鳴くのを聞いて、兵部卿宮へ歌を贈る。		
		女一宮らが薄物で涼んでいるのを、薫垣間見る。		
53	手習	宇治院で倒れていた浮舟、横川の僧都に助けられる。		
		浮舟が身を寄せる小野庵の門前で稲を刈る人々。		
		髪をおろした浮舟、ただ硯に向かい、手習いをする。		
54	夢浮橋	浮舟のいる小野の里のはるか谷間を、薫の立派な行列が通る		
		薫の手紙を、尼君が開いて浮舟に見せる。		